様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ４ 月　 ９ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０６９３

研究課題名（和文）方略的介入は動機づけや学習観になぜ影響するのか：第二言語読解の成功感と自律から

研究課題名（英文）How can strategy intervention affect learner motivation and beliefs?

研究代表者
松本　広幸（Matsumoto, Hiroyuki）

北海学園大学・経済学部・教授

研究者番号：００５４９４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，読解方略，動機づけ，学習観を統合的視座に据え，英文読解における方略的介入から動機づけの向上や学習観の変化へと至る因果プロセスについて量的・質的に考察した。予備調査と本調査を行い，英文読解授業の中で質問紙と対応する自由記述紙を用いてデータを収集した。結果の概要として，明確な方向性は認められなかったものの，外国語としての英文読解の特徴として，動機づけから方略使用や学習観への影響よりも，むしろ方略使用から動機づけや学習観への影響の方が大きい傾向が見られた。質的データの分析では，要旨理解を中心とする方略の定着による読解意欲の向上，要旨理解の成功を通した学習者意識の肯定的変化が認められた。

研究成果の概要（英文）：The objective of this quantitative and qualitative study was to investigate the causal relations in perception among EFL readers' strategy use, motivation, and beliefs, using a strategy intervention. In two study sessions, questionnaire and interview data was collected from the participants. The results indicate that the participants' strategy use influenced their motivation and beliefs more strongly than their motivation influenced their strategy use and beliefs, and that the successful application of their main idea comprehension strategy enhanced their reading motivation and changed their beliefs positively.

研究分野：第二言語読解・習得

キーワード：方略的介入　読解方略　動機づけ　学習観　因果プロセス　要旨理解　意識変化

１．研究開始当初の背景

(1) 第二言語読解研究においては，読解プロセスの解明や読解方略の同定など認知的側面を中心に研究が進められ，動機づけのような情意的側面は積極的に研究対象と見なされてこなかった(Grabe, 2009)。方略使用と動機づけに関して，第一言語読解研究では読解方略と動機づけとの関係が指摘され(Guthrie, Wigfield, & Perencevich, 2004)，第二言語習得研究でも学習方略と動機づけの関係が報告されている(Oxford & Nyikos, 1989)。これらの研究成果の第二言語読解研究への援用可能性について，読解プロセス（第一言語/第二言語）や領域（読解研究/習得研究）の差異が正確な理解を妨げる可能性がある(Wigfield, 1997)。すなわち，第二言語読解研究における読解方略と動機づけの関係性の研究は，重要かつ喫緊の課題だと考えられる。

(2) 一方，第二言語習得における学習観の研究(Horwitz, 1988; Young, 1999)では，学習観が学習方略や動機づけと関係していることが報告されている。また，第二言語読解に関わる学習観の研究(Devine, 1988)でも，学習観が読解力に影響を及ぼす可能性について指摘されている。しかしながら，このような学習観に関する研究は数が少ない上，得られた知見が有効に活用されているとは言い難い。その理由のひとつとして，外国語として英語を学ぶ場合，英語学習や英文読解についての特定の学習観より，他教科と共通の一般的な学習観の方が強く影響する可能性がある。第二言語関係の学習観研究では，これらの点に十分留意した展開が求められる。

(3) 以上の点を踏まえ,「英文読解に成功する学習者像を求めて：動機づけ，学習観，方略の統合的視座から」(JSPS 科研費 22520619）をテーマに研究を実施した。結果を要約すると，方略的介入が大学生の読解方略使用を促し読解力を向上させたことに加え，読解への動機づけ（内発，外発，有能感）や一般学習観にもプラスの影響を与えた可能性が高い。しかし，方略的介入が動機づけや学習観にどのように影響を及ぼすのか，またなぜそのような影響が起こるのかについては，明確な研究成果を得るには至らなかった。近年の第二言語習得研究では，方略的介入が適切に行われた場合，学習者の方略使用を促し習熟度を高めるだけではなく，動機づけや自律性にも影響を及ぼすとの報告がある(Cohen & Macaro, 2007)。しかし，この報告でも方略的介入から動機づけや自律性への因果関係について明確ではないことに加え，読解という領域特性を有していない。

(4) このような経緯から，本研究課題では，方略的介入から動機づけおよび学習観への因果関係を量的/質的アプローチを併用した多角的視点からより詳細に検討した。このような検討を可能にするため，本研究では学習に対する成功感と自律学習を切り口とした調査を計画・実施した。その理由は，次のとおりである。

① JSPS 科研費 22520619 の面接調査において，適切な方略使用による英文読解の成功感や自律的な意識の萌芽が読解への意欲や読解を含む学習への取り組み方にもプラスに働いたとのコメントが，多数の参加者から寄せられた。

② Benson(2011)では，自律した学習者を学習行動，学習者心理，学習状況の 3 つの観点から捉えている。本研究では，読解方略使用，動機づけと学習観，学習成果としての読解力を上記の 3 観点に対応させ，学習者を包括的な視点から検討する。従来，方略，動機づけ，学習観といった個人差要因はそれぞれ個別に研究が進められる傾向にあったが，自律学習の視点に基づく本研究は，これらを統合的に検討することを可能にする。

２．研究の目的

第二言語習得研究において，方略的介入（方略変容を促す教育的介入）が動機づけなどの情意的側面に影響を及ぼしうるとの報告が見られるが，その因果関係に関しては明確ではない。本研究は，読解方略，動機づけ，学習観を統合的視座に据え，英文読解における方略的介入から動機づけの向上や学習観の変化へと至る因果プロセスについて，成功感や自律学習を切り口とする量的/質的アプローチにより考察することを目的とした。また本研究では，日本人大学生の第二言語読解における個人差要因の関係性と発達に焦点を当て，全体傾向だけではなく個人差の観点からも捉え，高等教育レベルでの英文読解指導に資する実践可能な新たな知見獲得を目指した。

３．研究の方法

(1) 初年度前期においては，教育学や心理学を含む文献調査を行い，方略的介入の具体的な方法について検討した。併せて，開発済み質問紙（英文読解方略，英文読解動機，英語学習動機，一般学習観についての 4 尺度：Hiromori，Matsumoto，& Nakayama，2012 等）の再検討，新たな質問紙（英語学習や英文読解に関わる学習観，成功感，自律的意識を調査する 3 尺度）の開発（Benson，2011; Kamhi-Stein，2003; Yang，1999 等を参考），ならびに面接調査実施に向けての準備を行った。初年度後期においては，本調査に向けて質問紙（量的データ）と面接（質的データ）を密接に関連づけた予備調査を実施した。予備調査では，各尺度の構成概念妥当性と下位尺度の内的整合性を再検証すると共に，本研究で切り口とする成功感および自律的意識の尺度が他の尺度とどのように関係しているかを精査した。さらに，その精査結果に基

づき構成した面接を行い，面接協力者の反応（質的データ）と質問紙の精査結果（量的データ）を比較・検討した。具体的には，社会系，人文系，工学系専攻の大学生各 50 名程度(合計約 150 名)に調査協力を依頼した。調査協力者に対して質問紙調査を実施し，SEM を中心とする検証的因子分析により開発済み質問紙各尺度の構成概念の因子構造を確認すると共に，新たに開発する質問紙に関しては探索的因子分析を併用した。成功感と自律的意識の尺度と他の尺度との関係性については，SEM による統合的分析に加え，観測変数（各項目）レベルでの相関分析を行い精緻に検討した。質問紙調査実施後，各専攻から数名を選考し面接調査を行った。

(2) 次年度前期では方略的介入を含む英文読解授業を実践し，併せて本調査（質問紙，面接，授業日誌，読解力テスト等）を実施した。後期においては，データ処理および結果の分析と考察を行った。

① 英文読解授業において，授業参加者の方略変容，読解力向上，ならびに動機づけや学習観へ及ぼす効果を目指す方略的介入（要旨理解，推論，調整，モニタリングの各方略および協調的使用）を行った。研究代表者の所属校の大学生 100 名程度を参加者としたが，専攻の異なる３学部（経済，人文，工学）を対象とした。方略的介入は，デモンストレーションとスキャフォールディングから始め，授業活動に組み入れて繰り返し練習を行うことで明示的に教え，メタ認知的意識を高めるように工夫した。

② 本調査とデータ分析に関しては，方略的介入が動機づけや学習観へ及ぼす効果の検証，その因果関係について考察を行った。方略変容については自己評価だけではなく読解力向上を客観的観点とした。英文読解授業参加者に対して，授業開始直後にプリテスト（質問紙Ｉと読解力テストＩ），終了直前にポストテスト（質問紙Ⅱと読解力テストⅡ）を行った。プリテストの結果に基づき面接対象者を 10 名選抜し，個別に半構造化面接を実施した（成功感や自律的意識に関する多角的質問を中心に構成）。本研究では Dörnyei(2007)に基づき，タイプの異なる 2 種類のデータ（プリテストとポストテストから量的データ，面接から質的データ）を活用することにより，事象（方略的介入が動機づけや学習観へ及ぼす効果）に対する相補的な理解を深め，対象となる要因の因果関係をより精緻に考察した。本研究では，SEM と相関分析（関係性の変化）および t 検定と効果量（介入効果の推定）を用いて全体傾向を分析した。個人差に関してはクラスター分析を行い，個人が有する特性の違いに基づきグループ化した。続いて ANOVA を用いてグループによる介入効果の違いなどを比較した。量的分析と並行して，成功感や自律的意識に関しては主に質的なアプローチにより分析を行った。この分析にはテキストマイニングソフト SPSS Text Analytics for Surveys を援用し，方略的介入から動機づけの向上や学習観の変化へと至る中での成功感および自律的意識の働きについて検討した。

４．研究成果

(1) 予備調査における中間的成果として，量的データの分析から読解方略使用，読解動機づけ，学習観の間には関係性があること（2010 年度基盤研究 C「英文読解に成功する学習者像を求めて：動機づけ，学習観，方略の統合的視座から」のフォローアップ）に加え，質的データの分析を通してこれらの要因間には因果プロセス的な特徴があることが示された。具体的には，外国語としての英文読解では，動機づけから方略使用や学習観への影響よりも，むしろ方略使用から動機づけや学習観への影響の方が大きい傾向にあり，成功感が橋渡し的な役割を担っているとの暫定的結論を得た。この分析結果は中間的・暫定的であるが，本調査での方略的介入を伴う英文読解授業の実施と同時展開で行う量的データと質的データの相補的分析（トライアンギュレーション）に対する予見性を提供した。すなわち，一連の研究から得られる知見は，外国語としての英文読解授業の改善に資する可能性が高いと判断した。

(2) 本調査においては，英文読解授業の中で予備調査と同じ方略的介入を実施してデータ収集を行い，対象学生の読解行動や意識の変化について分析した。本調査の分析は，予備調査で得られた暫定的結論に対するトライアンギュレーションに主眼を置き，その妥当性について検討した。結果として，方略使用，動機づけ，学習観の因果プロセスに関して明確な方向性は認められなかったが，概ね予備調査と同様の結論を得た。質的データの分析では， 読解練習，要旨理解，読解行動（方略）の定着，読解意欲の向上，学習者意識の変化，語彙学習に関する 6 要因が抽出された（SPSS Test Analytics for Surveys 援用）。これらの要因間の因果プロセス的特徴の概要として，要旨理解を中心とする方略の定着による読解意欲の向上，ならびに要旨理解の成功を通した学習者意識の肯定的変化が見られた。教育的には，要旨理解を中心とする方略から動機づけおよび学習観への因果関係が認められたことから，英文読解授業における方略的介入の意義や効果について肯定的な示唆を与える結果となった。

(3) 研究最終年度においては，本研究課題の総括を行った。本研究の目的は，読解方略，動機づけ，学習観を統合的視座に据え，英文読解における方略的介入から動機づけの向上や学習観の変化へと至る因果プロセスについて量的/質的アプローチにより考察することであった。結論として，外国語としての

英文読解の因果プロセス的特徴として，動機づけから方略使用や学習観への影響よりも，むしろ方略使用から動機づけや学習観への影響の方が大きい傾向が見られた。これらの研究成果について広く公開・共有し，高等教育レベルでの英文読解指導の高度化・活性化の推進を図った。具体的には，大学英語教育学会(JACET)北海道支部研究会，米国応用言語学会(AAAL)，英国応用言語学会(BAAL)，米国ハーバード大学主催の FLEATVIにおいて，関連する研究成果について学会発表を行った。論文執筆に関しては，最終成果を著名な国際学術誌(Applied Linguistics と Language Learning)に投稿したが採択されなかった。代替的措置として，北海学園大学論集に論文"A Qualitative Probe Into the Causal Relations Among Strategy Use, Motivation, and Beliefs in EFL Reading"を投稿し掲載された。

本研究の意義は次のようにまとめられ，第二言語読解の観点から応用言語学や第二言語習得研究の発展・深化に貢献したと考えられる。
① 方略的介入から動機づけおよび学習観への因果プロセスを考察することで，情意的要因にも波及効果があると仮定される方略的介入の教育的妥当性について検証した。
② 同様に，第二言語読解における認知的要因と情意的要因に関する統合的研究（すなわち，複数の個人差要因をひとつの統合的視座から鳥瞰的に捉える研究）の重要性を明確化した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Hiroyuki Matsumoto、 Tomohito Hiromori、& Akira Nakayama、 Toward a tripartite model of L2 reading strategy use, motivations, and learner beliefs、System、査読有、Vol.41、2013、pp.38 - 49

② Hiroyuki Matsumoto、Akira Nakayama、& Tomohito Hiromori 、 Exploring the development of individual difference profiles in L2 reading、 System、査読有、Vol.41、2013、pp. 994 - 1005

③ Hiroyuki Matsumoto、 A Qualitative probe into the causal relations among strategy use, motivation, and beliefs in EFL reading、北海学園大学論集、査読なし、Vol.166、2015、pp.33 - 52

〔学会発表〕（計６件）
① 松本　広幸、ストラテジー，ビリーフ，動機づけからの Reading Fluency の向上 “Reading fluency from the perspectives of strategy use, beliefs, and motivation”、大学英語教育学会(JACET)北海道支部大会、北海道教育大学札幌校、2014 年 6 月 28 日

② Hiroyuki Matsumoto、Hiroya Tanaka、Validating a tripartite model of strategy use, motivation, and learner beliefs in L2 reading、BAAL 2014、ウオーウイック大学、2014 年 9 月 4 日～6 日

③ Hiroyuki Matsumoto、Neil Heffernan、Examining the motivational features of English as a foreign language reading、AAAL 2015、フェアモント・ロイヤルヨーク、2015 年 3 月 21 日～24 日

④ Chikako Aoki、Hiroyuki Matsumoto、An investigation of strategy use during SCMC (synchronous computer-mediated communication) and its relation with linguistics measures、FLEAT VI、ハーバード大学、2015 年 8 月 11 日～15 日

⑤ Hiroyuki Matsumoto、Chikako Aoki、Exploring EFL reading development as ecological systems in social contexts、BAAL 2015、アストン大学、2015 年 9 月 3 日～5 日

⑥ 松本　広幸、英文読解方略，動機づけ，学習観の社会文脈的考察：生態学的アプローチの枠組みから、大学英語教育学会(JACET)北海道支部研究会、北海道武蔵短期大学、2015 年 10 月 17 日

〔図書〕（計１件）
松本　広幸、廣森　友人、他、英語教育学の今 -理論と実践の統合-、2014 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　広幸　（MATSUMOTO, Hiroyuki）
北海学園大学・経済学部・教授
研究者番号：　00549404

(2)研究分担者
廣森　友人　（HIROMORI, Tomohito）
明治大学・国際日本学部・准教授
研究者番号：　30448378

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：